

FORUM

Vol.11

大阪府立大学
高等教育開発センターニュース
「フォーラム」

第11号

CONTENTS

- | | |
|----------------------------------|---|
| FDワークショップ報告 | 2 |
| 授業アンケート報告 | 4 |
| JCSS結果報告(2)
—能力や知識の増減に影響する活動— | 6 |
| 編集後記 | 8 |

FDワークショップ報告

今年で3回目となるFDワークショップが、平成20年10月31日に開催されました。過去2回のワークショップでは「GPA 制度」がテーマでしたが、今回は、「大学初年次の基礎ゼミナール科目の設計」が課題として取り上げられました。大学初年次における少人数ゼミナールは、学生の学びを、大学入学以前の「受験中心の学習」から「大学での学び」へとスムーズに転換させるため、多くの研究型大学で取り入れられ、高い教育効果をもたらしています。一方、本学においては、現在、カリキュラムデザイン会議のなかで、その導入が検討されているところであります。

ワークショップでは、初年次少人数ゼミナールの目的や他大学での導入事例についてレクチャーが行われた後、各学部学科からの計37名の参加者が、6つのグループに分かれて「基礎ゼミナール科目」の設計を行いました。そして、新入生の現状の問題点と、それを解決するための「基礎ゼミナール科目」の具体案について、各グループから発表が行われました。ユニークな科目提案が相次ぎ、質疑応答では議論が大いに盛り上がりましたが、ここではそのうちの2つを簡単にご紹介します。

「ビジネスモデルをつくろう～君のアイデアで会社を起こせ～」では、学生による会社設立・特許取得までを視野に入れた、非常に

意欲的な科目が提案されました。一方、「ユニバーサル(デザイン)大学」では、大阪府立大学の施設等について、ユニバーサルデザインの立場から改善提案を行っていかうとする、今すぐにも始められそうな科目が発表されました。

発表後のディスカッションやワークショップ後のアンケートから、多くの参加者が、大学初年次における「学びへの動機付け」の必要性を強く感じていることがうかがえました。また、このような少人数ゼミナールを何らかの形で導入すべきとの意見が数多く寄せられました。もし、少人数ゼミナールが実現されれば、新入生を大学での学びへといたざなう上で、大きな効果が期待できるのではないか、そんなことを感じさせてくれるワークショップでした。

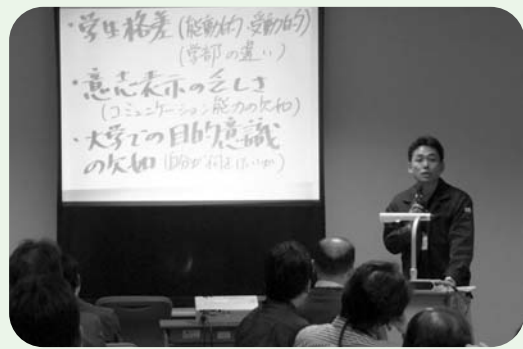
本ワークショップは、議論と作業を通して、参加者の教育改善への意識を更に高めてもらうことを目的として開催しております。また、それだけでなく、「他学部、学科のいろいろな先生方からの意見を聞くことができ、大変ためになりました」とのアンケート意見が示すように、人的交流の1つの場を提供することも、本ワークショップの持つ大きな意義であると考えています。今後とも、多くの教員の方々に積極的にご参加いただければ幸いです。

(星野)

FDワークショップに参加して

瀬田 和久 (理学系研究科 情報数理科学専攻)

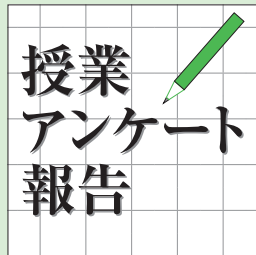
FDワークショップのテーマ「大学初年次の基礎ゼミナールの企画」は、教養基礎教育に携わった経験のない私にとって少々戸惑いを憶えたテーマでありましたが、事前配布された資料を読み進めるうち、受動的学習から主体的で能動的な学習への「学びの質的転換」を促す教育のあり方について議論する主旨であることがわかりました。その必要性は以前より指摘され私も認識してきていたのですが、2年次以降に後続する専門科目群への学習の動機付けを与える機会として初年次基礎ゼミナールを位置づけることで、その具体策をより真剣に考える場となりました。学習意欲を高め達成感を与えるテーマは何か？テーマ遂行の過程でコミュニケーションスキルや情報獲得などの実践スキルの獲得を促すと同時に学習の仕方やものの考え方といったコアな能力をも育成するにはどうすればよいか？などの観点から知恵を絞り意見交換しました。「知識」「技能」「態度」「創造的思考力」といった学士力強化が叫ばれる折、専門教育においても、このような観点でカリキュラムを編成していくことは今後益々必要になっていくと思われます。この意味においても私にとって今回のワークショップは貴重な機会となりました。



香西 はな (総合リハビリテーション学部 栄養療法学専攻)

今年度は「大学初年次の基礎ゼミナール科目の設計」をテーマに話し合いました。科目の設計を行う前に、学生の現状について各学部の先生方と意見を交わすことで、全学部共通あるいは学部特有の問題点が明確になったように思います。大学に入学することを目標としてきた学生にとって、初年次の基礎ゼミナールは、大学での学びの動機付けを高めるうえで有意義であると感じました。

これまでFDセミナーには参加していましたが、先生方の話を聞いて納得していたのが正直なところです。このワークショップに参加し、大学教育について真剣に考える良い機会を与えていただきました。今回は意見交換が活発だったので、科目の設計にもう少し時間の余裕があればよかったかなと思いました。



—実施概要と 試行的分析ハイライト—

先般実施されました2008年度前期授業アンケートについてご報告いたします。今回は下記の要領で実施されました。

実施方法：原則として学生ポータルを通じてWeb上で実施
※経済学部の一部の科目では紙ベースで実施
対象科目：2008年度前期開講科目
回答期間：2008年6月2日(月)～8月8日(金)
※ただし集中講義の科目については別途設定
※期間中に中間結果をポータル上に公開するとともに、自由記述を各科目担当の教員にフィードバックする

次に、全体と部局別の対象科目数・回答(延べ回答者数)の学年別構成比・回答率は表1の通りです。今回から学部の全科目が対象となりますが、学年別構成比は全体では1年生が半数以上を占めており、2・3年生が2割強程度、4年生以上は5%弱にとどまっております。ただし、学部によっては2年生または3年生が最多のところもあります。部局別では、これまで同様、総合教育研究機構の科目および回答が最多です。また、回答率は前回(2007年度後期)は11.5%まで落ち込みましたが、今回は14%と若干回復しました。ただ、依然として低調には変わりなく、また例年、前期のほうが高い傾向があるので、後期で再び低落することなく少しでも改善するよう、学生への周知に努めてまいります。なお、後期は試行的に一部の科目でマークシート式の質問紙を配布して実施いたします。

■表1 科目数・回答の学年別構成比・回答率

	科目数	1年生	2年生	3年生	4年生以上	回答率
全体	1,190	51.7	23.2	20.5	4.6	14.0
工	201	21.2	34.9	39.5	4.5	9.1
生命環境	117	33.7	21.9	38.9	5.4	7.9
理	92	9.6	37.9	47.2	5.4	21.7
経済*	89	24.3	40.4	31.8	3.5	8.8
人間社会	182	23.5	36.8	31.9	7.8	11.9
看護	37	22.5	18.5	41.3	17.7	12.2
総リハ	72	18.0	26.7	36.2	19.2	15.3
機構	400	82.8	13.3	2.7	1.2	19.7

※ 単位:%(科目数を除く) * 紙ベース実施科目を除く

さて、前々号では出席率と理解度の関連を分析した結果をご紹介しましたが、今回は出席率に代えて受講態度と理解度(工学部は該当項目が無い{積極性}と{到達度評価})の関連を調べてみました。受講態度といっても学生の“自己申告”であり、質問も漠然とした問い方ではありますが、それでも理解度との関連は明瞭に現れています(図1～図8)。どの部局でも、受講態度が良いほど理解度も高まるという関係が、ほとんど直線的に見られます。私語や居眠りをしていると授業をよく理解できなくなるという然るべき結果が、学生の実感からも裏付けられたと言えるでしょう。(保田)

図1 積極性と到達度の関連(工学部)

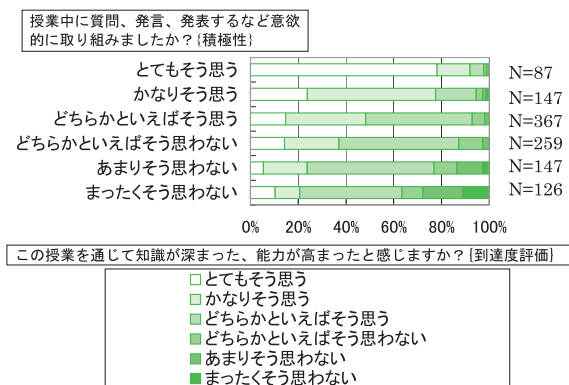


図5 受講態度と理解度の関連(人間社会学部)

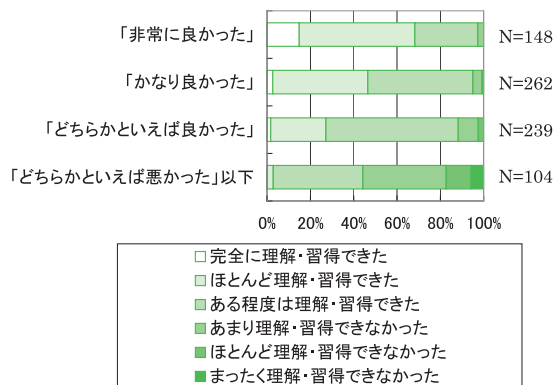


図2 受講態度と理解度の関連(生命環境科学部)

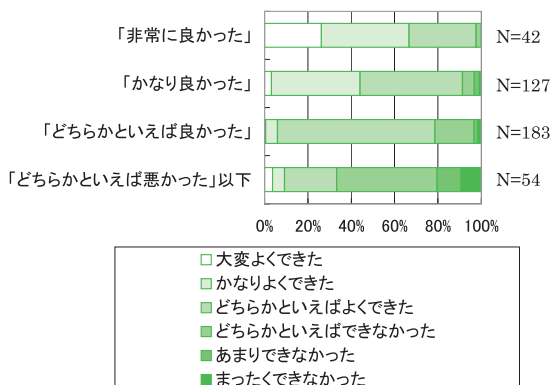


図6 受講態度と理解度の関連(看護学部)

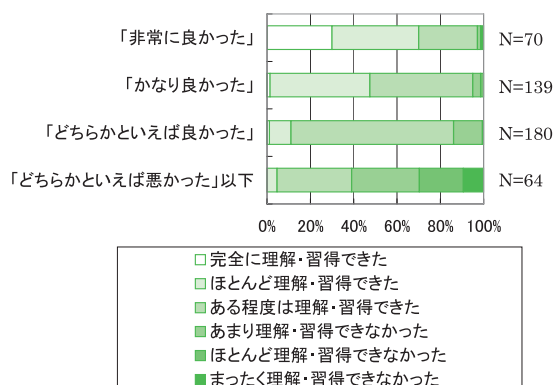


図3 受講態度と理解度の関連(理学部)

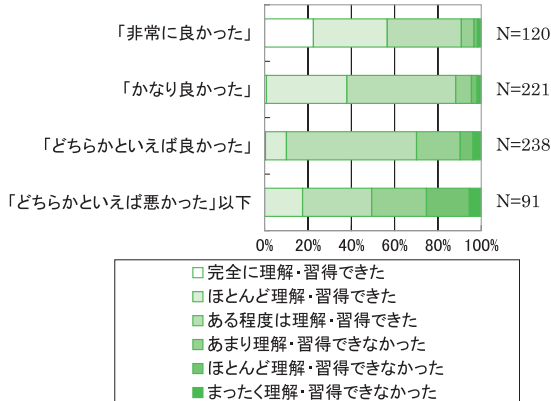


図7 受講態度と理解度の関連(総合リハビリテーション学部)

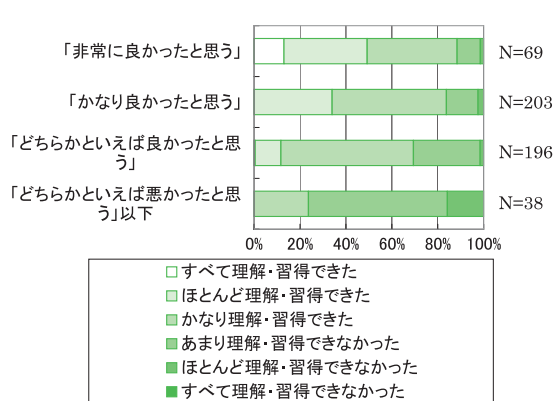


図4 受講態度と理解度の関連(経済学部)

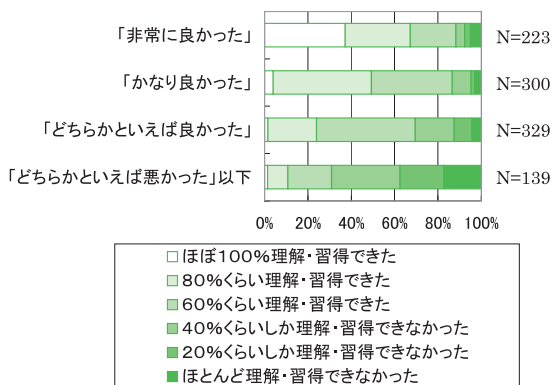
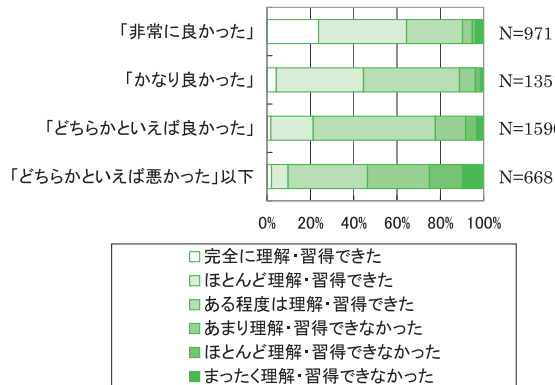


図8 受講態度と理解度の関連(総合教育研究機構)



JCSS結果報告(2)

— 能力や知識の増減に影響する活動

前号では、JCSS府大データを用いて、大学に対する総合的な満足度の規定要因を分析しました。今回は、さまざまな活動が能力や知識の増減にどのような影響を与えているかを調べてみます。活動に該当する質問項目は「過去1年間を振り返って、あなたは次の活動に1週間あたりどのくらいの時間を費やしましたか」、能力や知識は「入学した時点と比べて、あなたの能力や知識はどのように変化しましたか」を用いました。どちらの項目も択一式で、選択肢は前者は「20時間以上」「16-20時間」「11-15時間」「6-10時間」「3-5時間」「1-2時間」「1時間未満」「全然ない」、後者は「大きく増えた」「増えた」「変化なし」「減った」「大きく減った」です。双方を便宜的に連続変数と見做し、活動の全項目(ただし分布の偏りの大きいものは除く)を独立変数、知識や能力のそれぞれを従属変数として重回帰分析を行った結果が表1です。プラス・マイナスの符号は標準偏回帰係数の符号を示し、符号の数は有意水準(1%水準は1つ、0.5%は2つ、0.1%は3つ)を表しています。

活動を基準に見ていくと、まず学習関連では、授業や実験そのものよりも、授業時間外の勉強や宿題に励むことがさまざまな知識や能力の伸長にとってプラスになっております(授業や実験は「数理的な能力」の伸長にはマイナスとなっていますが、学部系統別に同じ分析をしたところ文系学部のみで同様の効果が見られました)。読書も、一般的な教養や異文化・グローバル問題の理解、批判的思考力、文章表現力を伸ばすのに寄与しています。新聞を読むこともプラスになっている項目が多いですが、読書のそれとはあまり重なっていません。他方、友達との交際やコンパ・懇親会、部活・同好会などの交友活動はやはり人間関係の構築や促進に関わる能力や知識にプラスの効果をもつ場合が多いことがわかります(異性との交際が人間関係以外でも多くの知識や能力にプラスとなっているのは奇異な印象を受けます。男女別に同じ分析をすると、男子のみで類似の結果が得られます。直接的効果ではなく、何らかの要因が媒介となっているのかもしれませんが)。その一方で、テレビを見たりコンピュータゲームで遊んだりという、どちらかといえば感覚的かつ受動的な娯楽(必ずしもそうとは言い切れない場合もあるかもしれませんが)はマイナスに作用する場合があります。コンピュータゲームに関しては、数理的な能力やコンピュータ操作能力の伸長にはプラスにはたらいっているようです(ゲームの種類に依るのかもしれませんが)。(保田)

■表1 能力や知識の増減に影響する活動

活動	授業時間以外で勉強や宿題をする	授業や実験に出席する	同性の友達と交際する	異性の友達と交際する	運動やスポーツをする	コンパや懇親会などに参加する	大学外でアルバイトや仕事をする	部活動や同好会に参加する	テレビを見る	家事や育児をする	読書をする（小説や一般書）	新聞を読む	通学にかかる移動時間	コンピュータゲームで遊ぶ	インターネットを利用する
一般的な教養				+							+++				
分析や問題解決能力	+++			+											
専門分野や学科の知識	+++	+++													
批判的に考える能力	+++				-			+++			+++				
異文化の人々に関する知識						++		++	--		++	+			
リーダーシップの能力				+++		+++		+++	---						
人間関係を構築する能力			++	+++		+++	+++	+++							-
他の人と協力して物事を遂行する能力	++		+++	+++		++		+++							
異文化の人々と協力する能力				+++								+++			
地域社会が直面する問題の理解				++								+++		---	
国民が直面する問題の理解				+								+++			
文章表現の能力	+			+							+++				
プレゼンテーションの能力	++			+++				++							
数理的な能力	+++	--								---			--	++	
コンピュータの操作能力	+++							++				--		+++	+++
卒業後の就職の準備状況	++			++		++								---	++
卒業後の進学の準備状況	+++								--						
時間を効果的に利用する能力	+++				+++		++							---	
グローバルな問題の理解											++	+++			
外国語の能力	+++		--									+++	-		

編集後記

FD活動は、講演会、授業アンケート、授業参観など多様化しております。しかし、それぞれの活動は必ずしもうまくいっているわけではなく、試行錯誤の連続です。今号で取りあげました「FDワークショップ」は、今年度、新しい企画を試みました。昨年度までの取り組みに対する要望や批判をふまえ、従来とは異なる形式で実施いたしました。詳細については、報告をご覧ください。

冬季から春季にかけて、さまざまな大学や学会で、FDに関わる催しが行われます。本学の教員、職員のみならず、そのような催しに参加されることをお奨めいたします。一部は、本センターのホームページでご紹介しておりますので、ご参照ください。

(高根)

大阪府立大学 高等教育開発センター センターニュース『FORUM』

平成20年12月25日発行

発行者 公立大学法人 大阪府立大学
総合教育研究機構 高等教育開発センター
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1
<http://www.fd.las.osakafu-u.ac.jp/>

印刷所 くすの木印刷
〒586-0081 大阪府河内長野市緑ヶ丘北町25-21

〈編集委員〉 木松 弘一 顧春芳 高根 雅啓 高橋 哲也(主任) 谷口 栄一 星野 聡孝 宮本 健助 保田 卓(副主任) 藤澤 圭子・本吉 紀子(事務担当)

この冊子は1500冊作成し、1冊あたり48円です。